

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00427

研究課題名（和文）イングランド共和制下における王党派詩集と歌集のメランコリックな政治性

研究課題名（英文）The Melancholic Politics of Royalist Poetry and Songbooks during the Interregnum

研究代表者

笹川 渉（Sasakawa, Wataru）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：10552317

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、共和制下における王党派の詩集および歌集に政治性とメランコリーの特徴が見られることを、口頭発表および論文を通じて公表した。主たる研究成果は、共著書の1章として発表した「牧歌と神話のクロールス イングランド内乱期および共和制下の歌集から」、および論文「メランコリックな王党派詩人 ラヴレースの『ルカスタ』」の2点である。両論では、印刷本や手稿での受容から、王党派詩人が執筆した恋愛詩が、政治的には国王や女王への忠誠を誓う作品として読解されていたことを明示した。後者の論では、内乱により不在となった国王への忠誠を、恋愛詩に表現される愛のメランコリーという観点から分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の初期近代イギリス文学研究ではあまり重視されてこなかった、共和制下における王党派の詩集および歌集に注目することで、王党派の韻文がどのように流通し、受容されていたかを考察した。手稿における王党派の詩の受容を考察した結果、共和制下においては恋愛詩が政治的な抵抗手段として大きな役割を担っていることが明らかになった。恋愛詩は共和制以前の記憶を喚起しながら、手稿の上で繰り返し再生産され、さらに歌集としても流布し、抑圧された娯楽を紙上で再現した。さらに、リチャード・ラヴレースの詩に見られるように、不在の国王を恋人として呼びかける詩群からは、愛のメランコリー気質を持った語り手の姿が浮き彫りになっている。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I made public the characteristics of politics and melancholy in royalist poetry and songbooks under the Interregnum (1649-1660) were made public through oral presentations and papers. The two main research results are 'Pastoral and Mythical Chlois in Miscellanies and Song Books during the English Civil War and Commonwealth', presented as a chapter in a co-authored book, and the article 'The Melancholic Royalist to His Love: Richard Lovelace's Lucasta'. In both essays, the reception of love poems written by royalist poets in printed books and manuscripts made it clear that they were read politically as works of allegiance to the king or queen. Also, the latter analysed Lovelace's loyalty to King Charles I, who was absent due to the English Civil War, in terms of love melancholy expressed in his poems.

研究分野：初期近代イギリス文学

キーワード：初期近代 イギリス詩 王党派 ミセラニー 手稿 歌集 メランコリー

1. 研究開始当初の背景

本研究課題を申請するに至った動機は、文学的に不毛とされる共和制から王政復古にいたる期間(1649-1660)にあって、イングランド初期近代文学研究が十分になされておらず、その期間に出版された王党派の詩集や歌集に焦点を当てたものは大変少ないことである。内乱期以前、あるいは王政復古以降の文学については豊富な研究がなされているが、ピューリタンが多数を占める議会派が政治権力の中枢を担うようになってからは、娯楽的な文化に対して厳しい眼差しが注がれていたため、歴史に残る文学作品が多く出版されていなかったことは否定できない。

しかしながら、国王不在の期間に文学活動が完全に停止していたわけではなかった。国王処刑以前に出版された作品も含め、手稿文化のなかで回覧されていた作品が出版されたのはこの時代であり、また、王党派が書いた韻文に曲をつけた歌集も流布していた。ただしこの時代の作品は、著名な詩人をのぞき、現代の学術的な書籍としては出版されていないこともあり、現代十分に読まれているとは言い難いことも、読者を遠ざけている理由となっている。そこで、この期間の文学状況を捉え直すために、本研究課題を思い至った。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」をふまえ、(1)共和制から王政復古にいたる期間(1649-1660)に出版された作品群には政治的意図があることを探り、(2)国王不在の期間に出版された詩をメランコリーから分析することで、この時代の韻文に見られる文学的特徴を明らかにするという目的を立てた。

(1)国王処刑以前に書かれ、王党派的特徴が現れている作品は、国王不在の期間に出版されていること自体に意味があると考えた。たとえば、王党派詩人口バート・ヘリックによる王党派的な享楽性が表現されている作品が、共和制下の1650年代の詩集や歌集として繰り返し出版されていた事実を踏まえることで、娯楽を剥奪され、政治的に弾圧されていた王党派の共感を表明した作品としてとらえることができるだろう。そこで、同様の例を他の詩人による作品にも認められることを明らかにしようとした。

(2)愛や娯楽を述べる王党派の詩集や歌集は、国王が不在であることへの王党派による政治的抗議であると同時に、詩人のメランコリーの気質が表明されたものであることを明らかにすることを目指した。メランコリーは、生真面目なピューリタンに与えられる王党派からの批判の言葉であったことはこれまで指摘されてきたが、共和制下において不在の国王を希求し続け、作品を執筆することで慰めとする王党派の姿もこの気質の表象としてとらえることを試みた。

上記の(1)と(2)を明らかにしようとする中で、国内外での研究において、さらなる進展が望まれる共和制下での王党派による詩集の位置付けを明らかにし、共和制以前と王政復古以後の韻文とがどのように接続されるのかという大局を見据え、その特質を新たな視座から論じることを目指した。

3. 研究の方法

「研究の目的」に記した、詩集の政治性とメランコリーの表象を調査するために、以下の2点に記載した文献を主な一次資料として研究をすすめた。

(1)印刷本での王党派の詩集

研究代表者が所属する研究機関で利用可能な一次資料のデータベース、Early English Books Online (EEBO) を利用しての資料調査をおこなった。内乱期、共和制から王政復古にいたるまで、数多くの詩集が出版されたが、その中でも主に王党派の詩集と王党派による歌集を調査、読解することで、その政治的意図をさぐった。具体的には、*Recreation for Ingenious Head-peeces* (1650), *The Harmony of the Muses* (1654), *Wits Interpreter* (1655), *Wit and Drollery* (1656), *Parnassus Biceps* (1658), *Wit Restor'd in Several Select Poems Not Formerly Publish'd* (1658), *Select Ayres and Dialogues* (1659) 等である。またロバート・パートン、ジョン・ダン、リチャード・ラヴレース、ウィリアム・ストロード、ジョン・サックリングらによる著作、韻文を現代の学術的なエディションを参照しながら読解した。

(2)手稿での王党派の詩の受容

王党派の作品が手稿として受容される際に、その手稿の筆記者にはどのような意図があったかを探るためにイギリスの研究機関で所蔵されている資料を確認した。具体的には、①大英図書館所蔵 Add MS 2725, 11811, 22603, 25303, 30982, 41996, 47111, Egerton MS 2725, Sloane MS 739②オックスフォード大学所蔵 MS Ashmole 36/37, MS. Don. c. 57, MS Eng. poet. b. 5, MS Poet Rawl. 153 等を通じて、王党派の作品が特定の意図や文脈のもとで筆記されている可能性を考察した。

4. 研究成果

本研究課題の主な研究成果は次の2点に集約される。

(1) 国王不在の期間に、王党派が韻文および歌集を通じて、内乱期以前へのノスタルジーと共和政府への抗議を示していたことを、共著書の1章である「牧歌と神話のクローリス——イングラント内乱期および共和制のミセラニーと歌集から」で詳しく論じた。1650年代に出版された王党派のミセラニーや歌集で、クローリスが繰り返し言及されている。その理由は、文学伝統上、神話や牧歌でポピュラーな人物というだけでなく、チャールズ1世の王妃であるヘンリエッタ・マリアを表す記号であることである。1653年から1658年にかけて出版されたヘンリー・ロウズによる声楽集 *Ayres and Dialogues* を見ると、詩人ヘンリー・ヒューズによる、クローリスを主題にした作品が多く認められ、女王を想起する作品となっている。さらに、ヒューズの作品を筆記した手稿、Add MS 47111 (大英図書館蔵) からクローリスを女王としてとらえていたことが裏付けられ、そのような解釈が共有されていたことが理解される。他の王党派による作品では、ピューリタンによる娯楽の弾圧と対置してクローリスを描きだしていることや、ストロードによるクローリスを描いた抒情詩が手稿で広く受容されていた例を提示し、クローリスがスチュアート朝と結びつき政治的な機能を果たしていたことを論じた。

(2) 王党派詩人リチャード・ラヴレースの詩作品を、本研究課題のテーマであるメランコリーという観点から分析した論考「メランコリックな王党派詩人——ラヴレースの『ルカスタ』」を発表した。内乱期から共和制下において、反議会派、国王支持者として活動し、投獄も経験したラヴレースの詩集には、恋愛詩を通じて国王への忠誠心が明確に表明されている。彼の詩は同時代の手稿では繰り返し筆記され、また、曲がつけられ歌集を通じて流布していたという事実から、王党派の間で大きな共感を呼んでいたことがわかる。大きな特徴は、詩集に登場する女性と国王を同一視して、権力を喪失した、あるいは処刑後の国王に呼びかけていることにある。このような語り手の姿に見られる不在の者を求める行為は、愛のメランコリー気質の者に見られる特徴ととらえられることを、ジョルジョ・アガンベンの論を援用しながら論じた。

上記2点の論考を通じて、印刷本だけではなく手稿文化のなかに作品を布置することで、印刷本を中心に構成されてきた初期近代イギリス文学研究が看過してきた、手稿文化の重要性と王党派のメランコリーとして特徴を明示した。17世紀中葉における手稿を通じての作品の受容のあり方は、今後も初期近代イギリス文学研究の重要性を担うことは間違いがない。

なお、本研究を進める中で、次の2点が新たな知見として研究対象になる発見があったため、今後の研究課題とする予定である。

(1) 王党派の歌集を調査する過程で調査した MS Mus. Sch. E. 451 (オックスフォード大学蔵) では、曲をつけた旧約聖書の『詩篇』が聖書と異なる順番で筆記されており、筆記者が内容を考慮しながら意図的に配列を変えていたことが窺える。さらに筆記された詩篇の合間に、王党派的快楽を示す詩の楽譜を挿入しているため、筆記者は国王を念頭において『詩篇』を執筆していた可能性があり、『詩篇』の手稿での受容と王党派の関係が今後の検討課題のひとつである。

(2) 王党派の手稿を調査する過程で、共和政府を支えた詩人ジョン・ミルトンの *Paradise Lost* の一部が、18世紀に作成されたとされる Add MS 34744 および Lansdowne MS 92 (どちらも大英図書館蔵) に筆記されている例を発見した。興味深い点は、両手稿ではミルトンの原文と同じように修正が加えられていることから、同一人物が筆記したと推測されることである。このふたつの手稿に関する詳しい研究はまだなされていないため、両手稿の関係や、テキストの修正の意味など、ミルトン研究に新たな視点を与えられる可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 笹川 渉	4. 巻 74
2. 論文標題 偽キリストとしてのサタンとイングランド国王ーミルトンの『失樂園』における欲望と偶像崇拜	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 オベロン	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹川 渉	4. 巻 93
2. 論文標題 ブラソンの政治学 『機智と冗談』におけるダンの「恋の旅路」とミルトンの『失樂園』の対比	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英文學思潮（青山学院大学英文学会）	6. 最初と最後の頁 93-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 笹川 渉
2. 発表標題 LovefaceのLucasta (1649) について 獄中の恋愛詩
3. 学会等名 オベロン会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笹川 渉
2. 発表標題 王党派の詩集 Wit and Drollery (1656) をめぐって
3. 学会等名 オベロン会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笹川 渉
2. 発表標題 『パラダイス・ロスト』における共同体
3. 学会等名 十七世紀英文学会東北支部2018年度第3回3月例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岩永弘人、諏訪友亮、谷本佳子、笹川渉他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 音羽書房鶴見書店	5. 総ページ数 431
3. 書名 緑の信管と緑の庭園	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------